サクラの文化史および分類学的研究について

Some Remarks on the Cultural History and Taxonomy of Japanese Flowering Cherries

平成 18 年度日本造園学会賞受賞者業績要旨

Wybe KUITERT,　ウィーベ・カウテルト

1.　はじめに

外国人として桜の文化史を理解するのは難しいと思いましたが、縁あって研究する事は大きな挑戦になりました。広い意味で研究出来るのは私の喜びで有り、造園学の域を越え、植物学、文学的面を含めて桜文化の豊かな意味に近づきたいと桜を追ってみました。この度平成１８年度日本造園学会賞受賞者業績要旨として受賞した英文の学術論文を抜粋し、日本語の研究概要にまとめてみました。私の理解の足りない点は御容赦頂きたい。

2.　生態学と文明

日本桜の野生種は数少なく、それに対し園芸品種は多数有り、園芸品種はどのように出来るかをまず生態学的に説明したい。自然種は限られた地域に生え、その地域は種別に分かれている。園芸品種とは個別な種類から選抜した良質のものか、二つの個別な種類の交差によって出来た雑種の中から選抜した良質のものを長期間に接木、挿し木等で増やし続け園芸品種として名をつける。園芸品種が人間の手によって作られ続け時代を経て現代にまで継続されている。もちろん古代の桜の名の由来が分かっていても生態の元は分からない所がある。

桜は光を好む植物であり、自然から森の縁、もしくは大木が倒れ開けた場所に芽を出すのである。人間によって開かれた開墾地はむろん桜に最適な生地となる。古代日本の領土が文明と共に開け、桜の自生出来る地域も広がったのである。暗い陰の多い原生林が人の手によって倒され、それによって明るく優しい桜のある里山の風景へと変貌した。現代に於いては誰もが承知している自然の風景のなかの桜のイメージである。その明るい文明と共に広がる桜のイメージは古い歌からも読み取れる。たとえば、『万葉集』の「たゆらきの　やまのをのへの　さくらばな　さかむはるへは　きみししのはむ　1776」　尾根の上の桜は毎年春の明るい恋の思い出の象徴になる。周りの山に見える桜は奈良時代、歌に讃美される風景のなかに入る。

上層階級に栄華の花として楽しまれ、京都西北に江戸初期、変異性の広い名のある園芸品種の群れが現れてくる。それを理解する為に生態、地理、政治、文化、園芸、造園を背景に考え、その不思議な出現を推測してみた。古い品種の歴史資料はほとんどなく、まだ沢山研究課題が残っております。

3．公家の桜

奈良、長岡京、平安京遷都（794 年）へと時代が移り。平安時代政治的安定の中で公家文化が花ひらく。今までは花と言うのは梅であったが、新しい象徴として仁明天皇の折、御所の寝殿前に梅の変わりに桜が植えられ、左近桜となる。960 年御所が火災に遭い、寝殿再建とともに新しい桜が植えられた。これは吉野より運ばれた桜であると記録に残っている。

現在吉野は山桜を中心とした里山の風景である。7 世紀以来吉野の山は桜を蔵王権現の神木としていたので伐採は禁じられていた。一斉に大量に植える時もあったが、年々巡礼者達は里人が売る桜の苗を買い求め、供え品として植えたのである。安定した桜の里山の維持管理はこれにより何百年間続けられて来た。植物学的面から見ると吉野の桜は昔も今とさほど変化がない山桜であっただろう、すると 960 年寝殿前に植えられた吉野の桜とは山桜であったと思われる。

図-1　1713 年の『和桜吉野山勝景圖』に見られる巡礼道にそって植えられた桜

皇族と公家の中心たる花、桜は文化的意味が大きくなり、文学的意味が濃くなる。しだいに桜に興味が注がれ、誰もが競って手に入れようとする。たとえば藤原定家の日記、『明月記』に桜の植える事や、増やす方法の話が度々出てくる：「嘉祿二年正月廿七日天晴昨今剪庭前小樹續八重櫻枝五六本　嘉禄三年閏三月二日去々年春所繼之八重櫻花欲開似之養心神冬春之間栽木皆似不枯葉各萌」

この文を読むと前栽に植えられた桜の木の増やしが書いてある。旧暦を現代に変えてみると、二月終わり頃、蕾はもう活動しはじめ、接木するには遅すぎる、だが根のついた枝を切り落とす為（取り木）には最適なタイミングである。取り木の方法は接木より大部簡単だと、素人でも簡単に増やして植えられるとある。上層階級に桜は人気の庭材料となる、好みの試論は『徒然草』の中にも見られる：「家にありたき木は松櫻。松は五葉もよし、花はひとへなるよし、八重櫻は奈良の都にのみありけるをこのごろぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花左近の櫻皆ひとへにてこそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり、植ゑずともありなむ。遅櫻またすさまじ。蟲のつきたるもむづかし。」

4.　政治的象徴

平安、鎌倉と時代が進むにつれ皇族と公家の政治的権力が衰退する。1338 年足利尊氏が京都に室町幕府を開き、後醍醐天皇は京都を逃れ吉野に還幸した。尊氏は光明天皇を位につけ擁立させる。これ以前、後宇多天皇詔じ桜千本を嵐山に植え、蔵王権現の祠を創建。後醍醐天皇崩御の後、将軍も新しい禅宗達に薦められ天皇の冥福を祈り奉らんと天龍資聖禪寺を建立、天龍寺十境に桜を植えた嵐山は拈華領と言い天竜寺領に記されている。この寺は公家の勅願寺、五山のランク中第二として権力を固持した。

どういう桜が嵐山に植えられたのかを推測してみよう。資料をみると奈良の吉野より桜は嵐山に入り、植物学的面から見ると、自生吉野の山桜の新芽は茶め、黄め、緑め、赤め、などが有り、特に赤めのものは美しい。

図-2　野生赤芽山桜の中に特に美しいものが見られる

若木に花はまださほどない。都へ運ぶに便利なこの小さな若木、葉をポイントに赤芽のきれいな桜を選んだのであろう。赤めの桜は都好みであったのか里人の選択でそうなったのかは定かでないが白い花と赤めの若葉のコンビネーションは一重桜の美の基準となった。嵐山からは赤めの品種としてアラシヤマ、タグイアラシ、ホウリンジと言う園芸品種が出たのはおかしくないのである。

その後 1357 年もっと明らかであったのは足利将軍は京の御所、寝殿前に自分の桜を植えたのである。この新しい左近桜は鎌倉から運ばれた大島系の桜、桐ヶ谷と言う名がついている。おそらく現在に見られる桐ヶ谷と同じ品種で、香りのある大きい花である。花一輪の直径は 5 センチ、よく手を掛ければそれ以上の大きさにもなる。明らかに政治的象徴として、いま鎌倉の桜は左近桜として植えられ、その翌年尊氏が世を去る。中世が進むと鎌倉の桜の政治的象徴が又出てくる。フゲンゾウと言うもうひとつの桜が鎌倉から運ばれ京に着いた。しかし 15 世紀中ごろ社会的、政治的不安定な時期であり応仁の乱勃発。乱が治まった後、禅僧横川景三がそのフゲンゾウについて記録する。横川はこの桜が花開く折、客人を招いて案内するのである、フゲンゾウは御所の北、相国寺、横川の住居近くに植えられてあった。応仁の乱が終わり、落ち着きを取り戻した始めての春、横川は待ちに待った気持ちで観にゆくのである。その折の感激は、はかりしれず下記の詩を詠む：「櫻之於我国也、不曰櫻曰花、如洛之牡丹、蜀之海棠、蓋所似貴之也。」

固い蕾が開き、桜は我国の安定と平和の象徴に感じる。フゲンゾウの桜の由来や名前についても説明をする横川：「世傳鎌倉有堂普賢安之、其地有櫻俗謂之普賢堂。或曰普賢象。和訓鼻與花音同、花之白且大者如菩薩所乗白象之鼻也。兩説孰是。平安城之西有此櫻、實名花也。」　普賢象は桐ヶ谷とともに鎌倉からの大島系の桜である。フゲンゾウは一重のキリガヤよりも豪華な八重の花で、咲く時期は長く、維持管理がよければ 18 メートルの高さにまでになる。

図-3　フゲンゾウの花の仕組みを見ると雌蕊が葉化され、子房がなく、種（核）は出来ない

御所にキリガヤが植えられた後、もうひとつの刺激的な桜、このフゲンゾウが都に入ったのである。かなりの距離の移動である、変異性の広い大島桜が京都まで運ばれた、遷都以来奈良より山桜が京に運ばれていた。奈良の山桜と鎌倉の大島桜は両方とも進化に於いて生態学的に独特な個性を発生し、別々の進化をたどった桜が京で出会うのである。これによりお互いに交差が始まり雑種が生まれる。両方の親は単なる野生種ではなく選別された絶品花であったので、そこから出た新雑種間にもっと優れた絶品が出て来た。その雑種の出た現場は御所と嵐山の間、特に仁和寺あたりと分かる。

5.　仁和寺と公家

天皇の意思を継ぎ仁和寺は伽藍の造栄が進められ、９世紀頃から法新王が歴代の門跡となり住訪として御室を営んでいた。周辺諸寺院など子院として最盛期には 70 以上を数えた院家建築と呼ばれるもので、御堂、経蔵、寝殿などがあり、寝殿辺りに桜が一本植えられてあったのだろうと充分想像できる。この院家建築の周囲を管理したのは仁和寺関係の石立僧と呼ばれる植木職であり、庭

樹、桜も含めての実践的知識は仁和寺に保管された室町時代の造園書『山水並野形圖』に見られる。皇室、貴族と仁和寺の関係は深く 12 世紀頃まで続く、さらに時代が進み寝殿造りから書院造りへと建築様式が移り、寝殿と同様、書院座敷も南向きに庭が面していた。そこには前栽として桜一本が植えられた場合があったと資料から読みとれる。仁和寺に応仁の乱が起こるまで 60 ぐらいの小寺院があったが、乱中に焼失、その近くにある妙心寺はすぐに復興されたが仁和寺は 17 世紀頃まで再興されなかった。妙心寺の周囲の土手に桜の木が沢山あったとの資料がある。この沢山の桜は応仁の乱前小寺院にあったものが妙心寺に移され、又、乱後、焼あとから大事に集められたものも含まれるであろうと推測される。資料がとぼしく今後の課題である。応仁の乱後、荒らされた庭の桜を仁和寺の僧は大切に保護し、絶品を植え続けた事は十分想像出来る。江戸初期になると桜の収集活動はこの辺りを中心としてに資料にあがってくるのである。

6.　庭の造形

源氏物語の中に桜と庭の情景を描写する文章がしばしばある。庭作りとしての材料、造形の仕方、桜の用い方等が読み取れる：「みなみひんがしは、山たかく、春の花の木、數をつくして植ゑ、池のさま、ゆほびかに、面白くすぐれて、御前ちかき前栽、五葉・紅梅・櫻・藤・山吹・岩躑躅などやうの春のもてあそびを、わざとは植ゑて」『源氏物語一乙女』。

御前近き前栽に数種の植物が人間のいる場所の近くに植えられ、その種類は一本ずっつ、桜でも一本だけで、これらは近景にあたる。南東の丘は庭の背景になり人間のいる場所、観賞する所から言うと遠景にあたる。決定的寝殿造庭園の中に桜は寝殿近くに一本、池の向こうの庭山に数本の春の花の木（桜）が植えられてあると想像できる。

源氏物語は次第に公家や武家の庭作りに大きなインスピレーションをあたえる様になる。桜の使い方も、たとえば亀山殿の庭に源氏物語の面影が映る。鎌倉時代の『五代帝王物語』によると：「大井河嵐の山に向て桟敷を造て、向の山には芳の山の櫻を移し植られたり。自然の風流求ざるに眼を養ふ」。寝殿から庭の池を望むと向こうには自然のままの嵐山の景色が背景に有り、亀山殿に行幸された亀山天皇は弘長三年（1263）二月十三日朝覲のため、この景色を眼にする。『増鏡』：「おほかたの世の氣色もうらゝかに霞みわたれるに、春風ぬるく吹て、龜山殿の御前の櫻はころびそむる氣色、つねよりことなれば、行幸あるべくおぼしをきつ。」

寝殿前には一本の桜が植えられてあった、この花の蕾が開く瞬間は何よりも美しく、これを観ようと、天皇の行幸の楽しみのひとつになる。亀山殿の外に

ある嵐山には奈良の吉野より運ばれた、たっぷりと植えられた山桜が花開くと白雲のごとく、みごとな遠景の景色になる。寝殿前にある桜の蕾は開花と共に可憐、華やかさ、雅やかさ、色鮮やかさ、多分芳香等も、間近に観る花の細部までの近景になる。亀山殿に於いても近景、遠景の造園の有り方、その観賞についてもはっきりとしている。

おもしろいことに『作庭記』にはこの事について記されてはいないのである。植物についての情景（取り扱い方等）は公家達の間では常識で当たり前の事となっていたので植栽の使い方についてはほとんで説明がされてない。著者は植栽について記する事は他から馬鹿にされるので記述必要無と、しかし後に出た造園書『山水並野形圖』は身分の低い、石立僧達によって書かれた為、自らの覚書として以前からあった桜の使い方が記されているのである。

『山水並野形圖』:「一　櫻ハ峯山深山イズクニモアレト　ム子（向こう）トハ里ヲ心ニカクヘシ　又深山青山の中ニモ櫻ヲ植テ面白　座敷ハ南ヲ方ト心ニカクヘシ　又陽山深山と思木陰ニ櫻一二本ウヘツレハ此山ノ奥ニ又里アルカト思ハル様ニ植ル者也　又櫻ハ木の風情タニアレハイカナル所ニモ植タルニナン（難）ニハアラヌ也　先度申カコトク其座敷ニタニ一本植ツレハ其余ハイツクニ植タレトモ難ナキ也　無相傳ノ人ハ二三本ナレトモ其座敷ニウヘスシテ何トモナク取ウユル程ニ相傳人難ヲナスナリ何事モ是ニ同クスヘシ。」

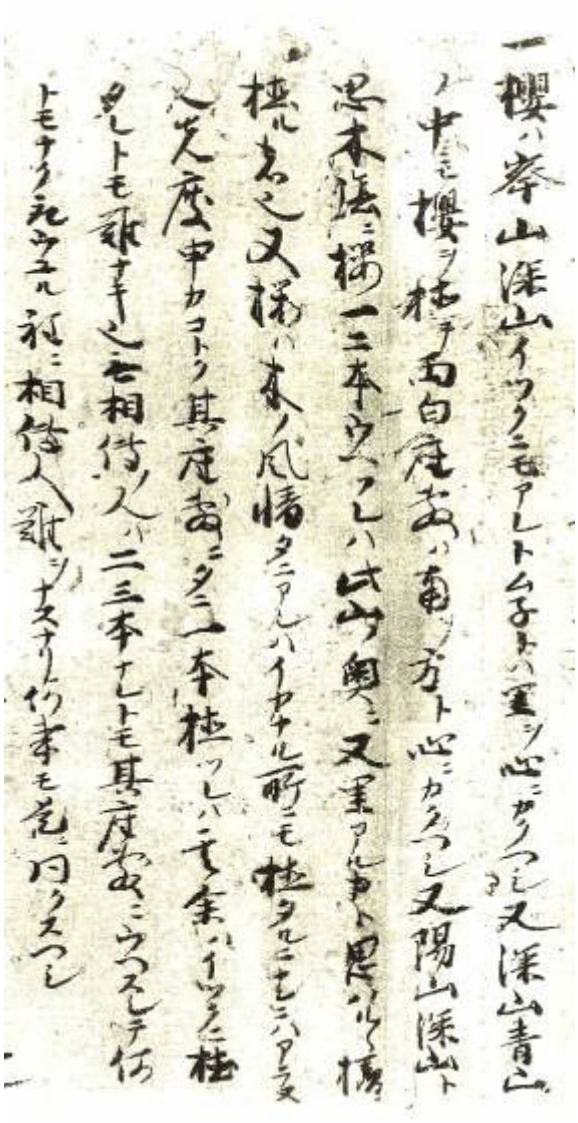

図-4　『山水並野形圖』桜についての一節

この文は一見理解しにくいようであるが解してみるとかなりはっきりした記述である。『山水並野形圖』では自然の風景にある桜は必ず里にある、いわゆる村、集落のある二次林として里山を示すのである。庭で用いる場合には一番奥方にある築山（陽山＝南端にある山）の間に一、ニ本植える事とし、そのうしろである景色として高い木々は深山をおもわせ、これによって太陽が後から照らすと桜の花は逆光で一層美しく光ってみえるのである。山間に植えられた事により里の谷あいの景色がかもし出され、人が住むことの出来るやさしい人里の風景があると想像させるのである。その又奥のほうに暗い深山、人が入らない原生林がある。

里の背景、山の上にある桜は満開の折り公家達も競って和歌の中に取り入れ

た。その詩的懐かしい風景は造園実践知識として描写され『山水並野形圖』から読み取ることが出来る。人間が落ち着く里山は桜によって湧き上がってくる。造園技法として桜を通して原風景を庭園の背景として再現、結果的には庭に心理的安心できる落ち着く場所を作るのである。

『山水並野形圖』の文中に南向きの座敷前に桜一本を植えると記されている。ニ、三本は多すぎるとはっきり記されており、この座敷前の一本は亀山殿の寝殿前の一本と同じように花の芳香、色、形、花吹雪等、細部のクローズアップならではの観賞が出来るのである。

図-5　十四世紀初頭に描かれた「法然上人絵伝」に見られる法住寺御所前の八重桜

桜についての文を最後まで理解するにはまず桜の苗の作り方の説明が必要である。昔でも、今でも、桜は種（核）から簡単に作られる、庭のものでも山にあるものからでも発芽させられる。又、鳥のフンから落ちた種は簡単に発芽し、この自生した苗を拾う事もある。拾った桜の苗の親はどの種類か分からないし、集めた種から作った苗の片親、花粉はどの種類からかも分からない。そう言う雑種を多く集めて畑に育成するとたまにユニークな絶品が出てくる。絶品の特徴は花や芽、枝振り等の細かい所に特に決められる。珍しいものは育成した植木屋にとってプライドでもあり、その絶品たる桜は良いものほど良いクライアントの手に渡り、場所も庭のベストの場所、座敷前の一本として植えられるの

である。無論枯れる前に出来るだけ増やす工夫をし、絶品の次世代を確保する。さほどでもない苗は庭の後方に背景として使われる。

仁和寺と近辺の植木屋は公家の庭の桜を保護したに違いない。何十個の園芸品種名は江戸時代の初めに記録されている。中世からあったもので偶然現れた品種ではない。仁和寺近くにある平野神社に 1630 年代頃桜の収集活動が記録に出る。後水尾天皇のサロン西洞院時慶がこの神社におよそ 30 本の桜を植えたと、時慶の日記に書かれている。これはある程度秘密なコレクションでもあったのだろう。その中に鎌倉の桐ヶ谷と普賢像も上げられている。その後、後水尾天皇は七種類の桜を勅命する、ここから江戸時代の桜収集の歴史が始まるのである。江戸時代中頃、大名蒐集家が何百種のコレクションを持ち、明治時代になると現代と同じ意味で桜の園芸品種は名札の付いている商品として世にひろがる。今、現在平野神社におよそ 40 品種、大島桜と山桜の優れた雑種で、これらの多くは昔、公家の庭にも用いられた桜であろう。仁和寺の桜は 1660 年代から収集され、現在 10 品種ぐらいが見られる。これも同様大島桜と山桜の雑種の絶品花である。上層階級から庶民へと広く行き渡った桜、待ちわびた観衆は桜花爛漫、春を楽しむ。日本は世界の国々の桜愛好家の目を引く文化的宝庫である。

後書き

この度、平成 18 年度の日本造園学会賞を受賞いたしました事「日本庭園」を研究する私にとりまして学会から認められたと言う事でもあり、誠に栄誉なことと感じております。1988 年の Themes, Scenes, and Taste in the History of Japanese Garden Art、改訂版として 2002 年ハワイ大学出版日本庭園の Themes in the History of Japanese Garden Art を基礎に最近の書物のうち桜の論文が学会内で「サクラについての文化史および分類学的研究」と言うタイトルで取り上げられた。

私の桜研究は 1990 からはじめ、1999 年の Timber Press 社出版 Japanese Flowering Cherries の本を書いたことから西洋と日本、今と昔を結び桜の意味を解明することになり。古くから日本人は桜を愛で園芸に於いても楽しみ、藤原定家の『明月記』にも細かい説明がみられる。野生種でも園芸品種でも定家にとって、桜は桜。桜を楽しむことは時代をへて現代へとひきつがれ、野生種か園芸種の区別は一般の人にとってとりわけ必要ではないのであるが、学問の分野になると特に分類学に於いては野生種を基本にして西洋の古典的分類方があり、日本の桜はその古典的枠組みにはめにくいのである。日本の植物学者でも、もちろん西洋の学者も共に簡単な園芸品種や雑種に立派なラテン語の学名をつけた例が少なくない。名前の混乱は特に西洋の方におおきいのである。私の研究は桜の園芸と文化の歴史的背景を調べ、日本と西洋のかけ橋として桜の理解を深けめようとの目的で書物にいたしました。この 1999 年の本は世界中から良

い評価を得た。

2004 年にハーバード大学のダンバートン造園校で開催されたスミソニアン国立自然史博物館と、USA 国立植物園との共同シンポジウムで「園芸の進歩と文化、政治の背景」とのテーマで行われ。この折の論文が今回受賞の対象になったしだいです。庭園の中に桜はどう用いられ、どの様な見方をされたのか、古代の文書を紐解きながらかかわりと進歩をまとめてみました。ここに載せた日本語の文書は英文の学術論文を抜粋したもので全文は："Cultural Values and Political Change: Cherry Gardening in Ancient Japan", in Conan, M. and Kress, W.J., (eds.) *Botanical Progress, Horticultural Innovation and Cultural Change*, Dumbarton Oaks Research Library, Harvard University Press, Washington DC. 2007, pp.128-145 をご覧いただきたい。

長年の桜研究におきましては日本文化研究センター、日本庭園研究センター、京都造形芸術大学、日本花の会、多摩森林科学園、京都大学上賀茂試験地、京都府立植物園他、沢山の方々に御協力いただき、多方面でお世話下さった名城大学の丸山宏先生はじめ皆様に深く感謝の意を表します。

主な研究資料

1）稲村徳（1972）:『徒然草要解』有精堂出版
2）江上綏（1967）:「童子口伝書つき山水并野形図・校刊」『美術研究』247・250
3）『角川日本地名大辞典』（1978-1991）角川書店
4）香山益彦（1931）:『御室の櫻』京都 ，大本山仁和寺
5）香山益彦（1933）:『平野の櫻』京都 ，平野神社社務所
6）香山益彦（1938）:『京都の櫻 -- 第一輯』京都園芸倶楽部
7）川崎哲也（1994）:『日本の桜』山と渓谷社
8）「源氏物語 / 紫式部著」山岸徳平校注（1958-1963）:『日本古典文学大系』14-18　岩波書店
9）櫻の會（1981）:『櫻』-- 複製版. 1-4 号 -- 東京，有明書房
10）『山水并野形図 』/ 増円撰（1930）: 東京，育徳財団，（尊經閣叢刊）
11）田村仁一，井山審也編（1989）:『遺伝研の桜 』三島，国立遺伝学研究所
12）外山英策（1973）:『室町時代庭園史』復刻 京都，思文閣
13）仲隆裕（2002）:「仁和寺寝殿庭園」『日本庭園研究』京都，日本庭園研究センター
14）日本花の会（1982）:『サクラの品種に関する調査研究報告』東京
15）久恒秀治（1967-1969）:『京都名園記』誠文堂新光社
16）飛田紀夫（2004）:「日本庭園の植栽史」『ランドスケープ研究』68・1
17）廣江美之助（1976）:『桜と人生』東京，明玄書房

18)「増鏡」時枝誠記，木藤才藏校注（1965）:『日本古典文学大系』87
岩波書店
19）松岡恕庵（1891）:『櫻品』（怡顔齋櫻品）文求堂
20)『明月記 / 藤原定家』(1911-1912)：国書刊行会編　東京，国書刊行会
21）山田孝雄（1941）:『桜史』東京，櫻書房刊行
22）サクラの研究資料提供：
日本花の会・さくら見本園，結城
京都大学上賀茂試験地
京都府立植物園